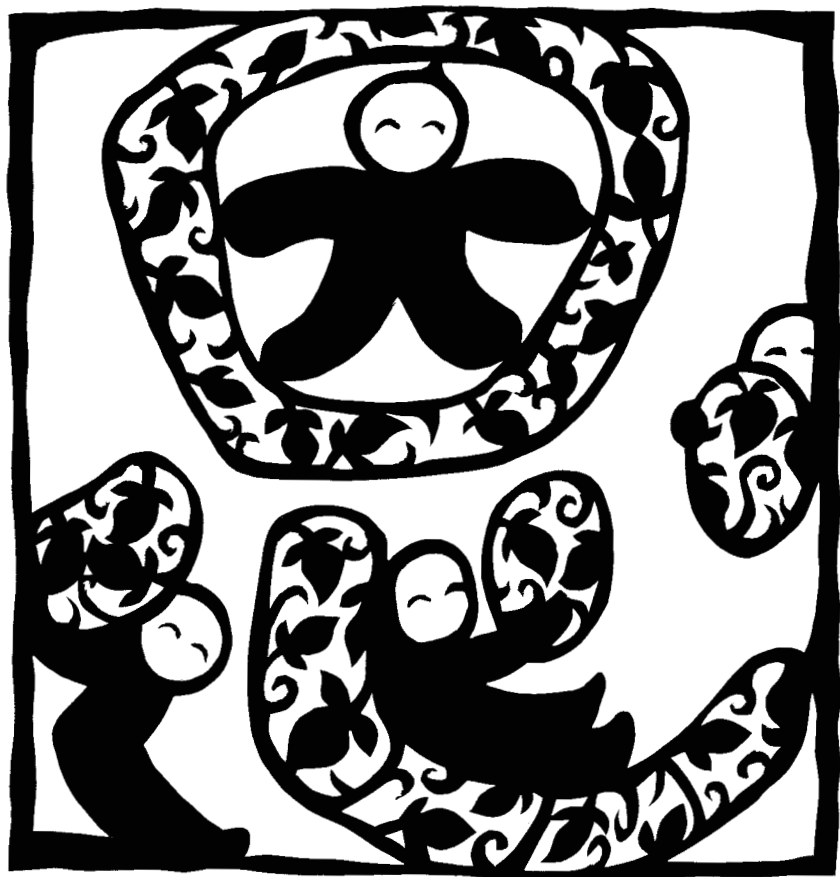


先人の恩恵に支えられて



# 便利な暮らしの中で

日本は今、世界でもっとも快適で便利な暮らしがでける国の一つです。家庭では、水道の蛇口をひねると水が出て、スイッチを入れると電灯がつき、お湯もすべに出来ます。家から出ると、街の商店には食料品、衣料品、家電製品など、さまざまな商品が溢れ、お金さえあれば欲しい物はいつでも手に入れることが可能です。

便利な暮らしは、たいへんありがたいことであると理屈ではわかっていても、もはや「あたりまえ」すぎて、感謝や恩恵を感じる感覚が少しずつ失われていっているのかもしれない。

今月は「恩」について考えてみたいと思います。



# 「恩」とは何か

「恩人」「恩恵」「恩に着る」「恩を売る」「恩に掛ける」「恩を仇で返す」「恩知らず」など、私たちの生活の中には、「恩」のつく言葉がたくさんあります。そもそも「恩」には、どのような意味があるのでしょうか。

辞書には、「他の人から与えられるめぐ

み。いつくしみ。また、自分のためになされたありがたい行為」（松村明編『大辞林』三省堂）と書かれています。

また、「恩」をその語源から見てみると、「因」と「心」の漢字から構成されています。因には「わけ、もと、ちなみ」の意味があり、それに心が加わると、「原因を心にとどめる」というような意味になります。

仏教でも、「恩とは、何がなされ、今日の状態の原因は何であるかを心に深く考えること」（中村元著『佛教語大辞典』東京書箱）と述べられています。

つまり、「恩」とは、現在、起こっている出来事の原因や物の成り立ちに気づくことによつて、ありがたさを感じることと言えるでしょう。

因  
十  
心

# 「与える木」

米国の作家・シエル・シルヴァスタインが書いた『The Giving Tree（与える木）』（邦訳『おおきな木』ほんだきんいちろう訳・篠崎書林）という物語をご存じでしょうか。

それは一人の男が子どもから老人になるまでの間、リンゴの木との交流を描いた絵本です。内容は次のようなものです。

一本のリンゴの木が、少年のための遊び場になります。少年は木に登ったり、枝にぶら下がったり、リンゴの実を食べ

たりします。疲れたときは木陰で昼寝をしました。少年は木が好きで、木も嬉しく思っていました。時は流れて、少年は遊びに来なくなりです。

ところが、ある日、成長した少年が木の前に現れます。木は以前のように遊ぶことを勧めますが、少年は、もうそんなことはできないと答えます。それよりも「買いたい物があるので、「おかねがほしい」と





言います。木はお金を持つていないから、「わたしのりんごをもぎとって、まちでうつたらどうだろう」と提案ていあんします。少年はリンゴの実をすべて持つて行きます。木はそれで嬉しかったのです。また、長い間、木は一人でした。

ある日、現れた少年はもう

大人になっていました。以前のようには遊ぶことを勧める木ですが、男は「ぼくにいえをくれるかい」と言います。木は「わたしのえだをきり、いえをたてることはできるはず」と言います。男は枝をすべて切つて持ち去ります。それでも木は嬉しく思います。また、長い間、木は一人です。

再び、年をとつた男が現れて、木に向かつて「どこかとおくへゆきたい、おまえ、ふねをくれるかい」と言います。木は「わたしのみきをきりたおして、ふねをおつくり」と言います。そして、男は幹みきを切り倒して船を作つて行つてしまいました。

長い年月が経たち、男は木のところに帰つてきました。切り株になつてしまつ

た木は何もあげられないことを謝り

ます。男は「わしいはまたいし

てほしいものはない。す

わってやすむしずかなば

しよがありさえすれば。

わしはもうつかれはて

た」と言います。木は

「このふるぼけたきり

かぶが、こしかけてや

すむのに、いちばんい

い……。こしかけて、

やすみなさい」と語りか

けます。

男はその言葉に従って切

り株の上に腰こしかけます。木は

嬉こしかったと言い、物語はそこ

で終わります。



# 恩を知り、自分を見つめ直す

皆さんは、この物語をどのように感じ  
じになったでしょうか。

物語では、木は決して見返りを求めず  
に男の求めるものを提供しますが、男は  
木に対して一度も礼を言うことはありません。  
男は与えられることを「あたりまえ」と思  
っていて、いつも求め続けるだけ  
です。男は「恩」を知ることができな  
いようです。

「恩」を知るとは、現在の状態の原因が  
何であるかを心で深く考えることです。  
今、自分が受けている「恩」とは何か、それ  
をみずからに問いかけることで、自分が置  
かれている状況が理解できるのです。

私たちは多くの恩恵を先人から贈ら  
れています。しかし、あまりにも豊かな生  
活の中で、それを「あたりまえ」と受け  
とめてしまっているのではないでしょ  
うか。恩を知ることができない「男」は、  
私たちの心の中に存在しているのもし  
れません。

世の中のさまざまあろそな争い事や職場や家  
庭でのトラブルの原因の一つに、「恩」に  
気づかずに、求め続けようとする心は  
たらきがあるのではないでしょう  
うか。  
次に紹介するのは、先人の苦勞を知  
り、大きな恩恵を受けていることに気づ  
いた男性の話です。

# 列車の遅れに イライラして



会社員の池田さん（40

歳）が十数年前、東京駅から新幹線に乗って高校の同窓会に出かけようとした

ときのことです。その日

は珍しくダイヤが乱れ、池田さんはプラットホームに長く待たされました。

混雑するプラットホームには「お急ぎのところ、列車が遅れてたいへん申し訳ありません……」という放送が流れ、多くの人々が時計を見ながら、いらだっている様子です。中には駅員に食ってかかる人もいました。

池田さんも焦り、イライラして少し腹を立てました。当時はまだ携帯電話が普及していなくて、相手にも連絡が取れません。その同窓会は新幹線の駅に参加者



が全員集合して、目的地にバスで向かう予定でした。結局、池田さんはかなり遅れて合流することができましたが、恩師や友人にずいぶん迷惑をかけてしまいました。

その夜の宴会のときのことです。池田さんは新幹線の遅れで迷惑をかけたことを詫びながらも、「日本の新幹線もまだまだ」というような発言をしました。

すると、その話を聞いていた同級生の木村さんが「おまえ、新幹線が完成するまでの苦労を知っているのか」と強い口調で尋ねてきました。木村さんの父親は長く国鉄に勤めていたのです。その場では言葉を濁した池田さんでしたが、木村さんのひと言が気になっていました。



# 先人の苦勞に気づく

翌日、池田さんは木村さんといっしょに新幹線に乗り、東京に戻りました。

新幹線の座席に座った池田さんは木村さんから、新幹線の優れた点や車体製造の苦勞、トンネル工事や陸橋りつきょうの建設など、新幹線にまつわる話をいくつも聞かされました。木村さんは、新幹線の開通が世界に誇る大事業であり、それまでの鉄道がいはんの概念さえも一変させたのだと語りました。

新幹線は昭和三十九年に東京・大阪間で開通したことぐらいの知識しか持って



いなかった池田さんは、木村さんの話を興味深く聞きました。

その中でも、東京駅から西へ延びる十キロ弱の工事区間の苦勞話に、池田さんはたいへん驚かされました。

その区間の一部の工事現場では、すで



に数本の列車線路が敷かれていて、一日に約千八百本もの列車がそのすぐそばを通過するという、たいへん危険な場所でした。工事期間中に大小百を超える事故があり、工事関係者七名の尊い犠牲があつたことを知りました。また、それに続く区間は、建物が密集するため作業空間が狭く、非常に困難な工事でした。それでも九名の犠牲者があつたことを教えられました。

やがて、池田さんたちを乗せた新幹線が速度を緩め東京駅に近づいたとき、木村さんが「今、話した工事区間はこの辺りからなんだ」と言いました。尊い犠牲の上に築かれた線路の上を通過するとき、池田さんは言い知れぬ思いに満たされました。

これまで何度も同じ場所を通過していたにもかかわらず、無知<sup>むち</sup>だったために何も感じる事がなかった自分。そして、前日、列車が時間どおりに運行されるのは「あたりまえ」と思って、イライラして腹を立てていた自分はずかしく感じました。

池田さんは、新幹線を開通させるため懸命に働いた多くの人々の姿を思い浮かべると、思わず心の中で「ありがたいなあ」とつぶやきました。それは、先人の苦勞を知り、先人の恩恵を感じることでもありました。

同時に、果たして自分は、社会や人々のために役立つことを願って日々の仕事に取り組んでいるのだろうか、という思いも浮かんできました。



# 「植福」のすすめ

恩恵を感じるということは、今の自分たちが多くの先人のおかげで快適に便利な生活ができることに気づくことではないでしょうか。そして、過去から現在に続くつながりの中で自分がそうした先人の恩恵に支えられていることを実感することであるとと言えるでしょう。

多くの先人に対して直接に感謝の言葉を伝えることはできませんが、私たちが受けている恩恵に対して報いることは可能です。その一つの方法は、受けている恩を実感し、それを次の世代や未来の人たちに伝えることです。

近代文学に大きな功績を残した幸田露伴は『努力論』という本の中で、幸福になるために、「惜福」「分福」「植福」という生き方を説いています。その中の「植福」という考え方は、恩恵に報いることを考えるうえでヒントを与えてくれます。

惜福とは、文字どおり福を惜しむこと、つまり、無駄づかいをしないことです。分福とは、自分の得た福を他の人に分け与えることです。植福とは、自分の持っている福、つまり自分の力や知識や経験を、次の世代や将来の人の幸福ため

に提供することです。

惜福、分福、植福を説明するのに、幸田露伴は「福」をリンゴの木にたとえて、次のように述べています。

大きなリンゴの木があり、毎年、立派りっぱな実をつけます。木を大切に管理して長



持ちさせるのが惜福です。立派な実を身近な人や友人に分け与えるのが分福です。そして、植福とは、リンゴの種を土に蒔まいて新しい木を育てること、さらにその木が実をつけ、より多く人々に実が行き渡るようにすることです。つまり、天地の生々せいせい化育かいくの作用を助け、人畜じんちくの福利ふくりを増進することが植福です。

植福とは何も難しいことでなく、自分の仕事や義務、役割をきちんと果たし、周りの人々が少しでも快適な生活ができるように努力することです。自分が持っている力や知恵や経験で、未来の人の幸福こうふくに貢献することです。それが、これまでの社会を築いてきた先人たちの恩恵に報いることにつながるのです。

上智大学名誉教授の渡部昇一氏は、植



福について、「今われわれは、古代に比べて、原人に比べてはるかに大きな幸福を得ている。これはすべて祖先の〈植福〉の賜物である。祖先のおかげをこうむっているわれわれは、同じように植福して子孫に残してやらなければならない。文明というものは、すべて先人が福を植えてくれた結果である」(『幸田露伴「努力論」を読む 運が見方につく人 つかない人』三笠書房)と述べています。

歴史の発展とは、多くの人々が自分の生まれたときよりも、よい世の中を実現して、子孫に伝えようとして努力した結果なのです。

私たちも、先人の恩に気づき、その恩恵に報いる人間になれるように日々努力していきたいものです。